

2008年度 研究分科会 研究概要（9:55～12:25）

	第1会場（シャトレ）	第2会場（エトワール）	第3会場（ヴァンドーム）
9:55～ 10:35	<p style="text-align: center;">利用企業の観点からの SaaS — SaaS は使える…「予感」を「実感」に変える 導入ガイドライン—</p> <p>開発／運用コストの増大などの、IT活用の問題解決のカギとして SaaSが注目されているが、セキュリティなど、利用企業側に不安材料があることも確かである。当分科会では、この不安の原因として SaaSについて利用企業の観点での判断基準が不足している点に着目し、SaaSの満たすべき要件の定義、SaaSに適した分野の判断基準の策定、他のITソリューションとのコスト比較の判断基準の策定を行い、「SaaS導入ガイドライン」にまとめた。</p>	<p style="text-align: center;">企画プロセスと要件定義プロセスの作業の明確化 — 企画と要件定義、あなたにわかりますか？その違い—</p> <p>企画プロセスですべきことと要件定義プロセスですべきことを切り分け、前者の完了基準を明らかにした。さらに、企画プロセスについて実務経験や文献をもとに詳細プロセス、成果物を見直し、実用性を考慮した上で標準化を行った。また、プロセス実施におけるステークホルダ間の合意形成手段として、論理的側面において「リザルトチェーン」を取り上げ、情緒的側面では「ヒューマンリレーションシップピクチャ」技法を考案し、有効性を検証した。</p>	<p style="text-align: center;">ITサービスの品質向上 — 身の丈にあった運用サービスの実現と継続—</p> <p>今やビジネスの必須基盤となるITサービスの運用において、顧客とITサービス提供者双方が満足し、無理のない合意を前提とする「身の丈にあった運用サービス」を提供し、ITサービスの品質向上を図るには「合意形成」と「継続的改善」を両輪として実施すべきであるとの解に至った。そこで、「合意形成」までのアプローチ手法やノウハウをまとめた手順書と、「継続的改善」のために現状のプロセスを評価する指標および自己診断ツールを開発した。</p>
10:50～ 11:30	<p style="text-align: center;">企業内ビジネスコンテンツのあり方 ～効果的な ECM の構築に向けて～ — 戦略的コンテンツ活用のすすめ—</p> <p>ビジネスコンテンツのあり方とECMの考え方を本分科会独自に整理した。次に、企業が抱えるコンテンツに関する課題を特定し、その解決手段としてECMという方法論が有効であることを検証した。そして、ビジネスコンテンツは、ビジネス目的と結び付けて戦略コンテンツに昇華させることが重要であるという結論に至った。さらに、この考えに基づき、効果的なECMの構築に役立つよう、成果をガイドラインとしてまとめた。 ※ECM: Enterprise Content Management</p>	<p style="text-align: center;">利用者部門を主体とした ユーザーインターフェース設計の進め方 — UI 設計に利用者要件を効果的に反映するには—</p> <p>ユーザーインターフェース設計において利用者要件がシステム仕様から漏れてしまう原因として、当分科会では具体的イメージが無いために利用者が容易に要件を提示することができない、提示した要件がシステム仕様のように反映されているかが明確に把握できないということが挙げられた。これらに対して、具体的な要件の提示手法としてのプロトタイプと、提示された要件のトレーサビリティに着目し研究を行った。また、実プロジェクトに本研究内容を適用し、定量・定性評価の両側面からその有効性を検証した。</p>	<p style="text-align: center;">情報セキュリティ対策の効果測定方法 — タテ・ヨコサイクルが生み出すベストプラクティス—</p> <p>企業はISMSの導入等セキュリティ対策を進めているが、事件/事故は年々増加している。必要なセキュリティ水準を維持するための具体的な基準や有効性測定方法を明示するために、事件/事故の原因分析とマネジメントシステムに潜む問題を明らかにした対策指標である「セキュリティ対策シート」を考案した。さらに、企業の管理サイクルへ導入することで、適切にセキュリティ対策の評価が行え、経営者にも報告しやすい仕組みをまとめた。</p>
11:45～ 12:25		<p style="text-align: center;">システム強度を左右する非機能要件の明確化 — 誰でもわかる！非機能要件の「見える化」—</p> <p>非機能要件の検討が不十分であるためテスト工程や本番稼動以降に問題が顕著化し、システム障害やコスト増加の要因となっている。当分科会では非機能要件を検討する際に発注者、受注者間の相互理解や重要度の認識に役立ててもらうための『非機能要件見える化ツール』を作成することとし、「体系シート」「チェックシート」「用語集」にまとめた。これらを使用することで非機能要件抽出の漏れによるリスクを低減することができる。</p>	<p style="text-align: center;">ネットワークセキュリティ対策の最適化 — 経営視点 × 担当視点 × PDCA = 最適化—</p> <p>ネットワークセキュリティ対策の最適化を「(1)経営者視点と技術担当者視点を合わせるための評価表を作成すること、(2)経営者の意識するコストとネットワークセキュリティ対策の効果やバランスについて分り易く示す総括表を作成すること、(3)両者合意してネットワークセキュリティ対策を計画し実行すること、(4)それをPDCAサイクルで見直しながら実施すること」で実現できると考え、その実施手順を提案した。</p>

2008年度 研究分科会 研究概要（13:40～16:10）

	第1会場（シャトレ）	第2会場（エトワール）	第3会場（ヴァンドーム）
13:40～ 14:20	<p style="text-align: center;">業務アプリケーションログ分析による業務改善 －業務改善要求に対するログの現状分析・予兆分析－</p> <p>現在ではシステムログが大量に取得されるも有効に活用しきれていない。目的が不明確な為、分析の方法論がなく必要なログが取り切れていないのではないかと。本分科会では、業務改善目的を設定し、新たな改善の方法論として「業務の成果と量・質の相関を分析するRQQ分析（Result、Quantity、Quality）」と「季節、トレンドなど4つの視点で将来を予測するSTEP分析（Season、Trend、Event、Period）」を確立した。</p>	<p style="text-align: center;">Ruby on Rails によるアプリケーション開発 －Rails は実業務で使えるのか？－</p> <p>Ruby on Rails(以下RoR)は高い生産性で注目を集めているが、基幹システムへの適用には不安要素が多い。分科会では、実証システムの開発を通して検証を行い、RoR適用検討時の判断材料を示した「適用指針整理表」、およびRoRを適用した開発を推進するための指針を示した「開発ガイドライン」を作成した。いくつかの留意点が見出されたが、RoRは基幹システム構築に十分な機能を備えており、現実的な選択肢になり得るとの判断に至った。</p>	<p style="text-align: center;">次世代企業ネットワークのあり方 －ワークスタイル抜本改革 Nippon Gambare Network－</p> <p>企業が抱える多様な経営課題解決の鍵はワークスタイルの変革にある。本分科会は、企業課題の解決というアプローチから、その柔軟性ゆえに様々な効果が期待されているテレワークに着目した。テレワークから導き出されたネットワーク未来像とは「いつでも・どこでも・どのITツールからでも業務が可能な究極のユビキタス業務環境」である。本分科会が描いた次世代企業ネットワークが、近い将来、今までのワークスタイルに抜本的な改革をもたらすと確信している。</p>
14:35～ 15:15	<p style="text-align: center;">情報システム部門が提案する現場業務改善 －情報システム部門だからこそできること 今日からすべきことは？－</p> <p>経営層が期待する情報システム部門へ変革するために、汎用的な技法やツールの検討を行うのではなく「今日からできること」を念頭におき、以下の2点に焦点を当て研究を進めた。①業務部門へのアプローチの改善による能動的な提案活動の実現。②情報システム部門だからこそ気づく現場業務の変化を観察する方法。この2点について「2つのアプローチ」と「6つのアンテナ＋ラウンド」として具体的に事例をあげ、その実践について提言を行った。</p>	<p style="text-align: center;">Webアプリケーション見積りの精度向上 －発注する側、受注する側が納得する見積りへ－</p> <p>Webアプリケーション見積りは、要求の高度化や技術進歩の速さ、不透明な市場価格などの要因から特有の困難が発生しており、受発注者間で見積りに対する認識が異なっていることも多い。本分科会では商談時、要件定義完了時の見積りに着目し、非機能要件のメニュー化や画面要素抽出方法の整備などによりWebアプリケーション特有の要素を補い、受発注者間の認識を合わせて見積りをする手法として「商談見積りフレームワーク2009」「画面構成要素引出法」を提案した。</p>	<p style="text-align: center;">仮想化技術の活用 －「仮想化を活かそう！」－</p> <p>仮想化技術の活用を考える上でサーバ統合以外にも魅力的で効果が得られる活用方法がある。本分科会では、バックアップの簡易化、DR(DisasterRecovery)への適用、グリーンITへの適用、運用管理の改善の4点に対して、本当にその効果が自社システムで享受できるか、中小企業を想定したケーススタディモデルをベースに仮説を立てて机上／実機検証を実施した。その検証結果から仮説の有効性を確認し、その内容を考察としてまとめた。</p>
15:30～ 16:10	<p style="text-align: center;">経営に貢献するIT投資評価方法 －IT投資の経営貢献度を鳥の目(全体)と 虫の目(個別)で評価する体制の構築方法－</p> <p>経営者の立場に立ち、IT投資の経営貢献度が見えない理由を探索し、これを克服するIT投資評価体制の構築を検討した。具体的には、経営者が求めている全体評価(鳥の目)として「エグゼクティブサマリー」と「IT投資評価報告書」を考案した。また、継続的な個別(虫の目)の事後評価を可能とする「案件別評価シート」と「IT基盤評価シート」を考案した。この鳥の目と虫の目を融合させて経営の管理サイクルに導入し、経営者が適切にIT投資評価をできる体制をまとめた。</p>	<p style="text-align: center;">Webアプリケーション基盤と開発環境 －そろそろWeb2.0化しませんか？－</p> <p>Web2.0(進化したWebアプリケーション)という幅広い概念から「リッチインターフェース」「非同期通信」「マッシュアップ」の3点をWeb2.0のコア技術と捉え、企画・要件定義・方式設計工程を対象とし、これらの技術に関する適用・方式設計ガイドラインを作成した。また、ガイドラインの実効性に重点を置き、模擬アプリの企画、設計及び実装、検証を繰り返し実施し、ガイドラインへのフィードバックを行うことで、ガイドラインの実効性及び有用性を評価した。</p>	<p style="text-align: center;">TPSによるシステム開発の現場力の向上 －魅力ある現場への挑戦！－</p> <p>様々な課題を解決して「魅力ある現場」にするには、現場が自律的に改善し自ら成長し続けること、つまり「現場力」が重要である。そこで、TPS(TOYOTA Production System: トヨタ生産方式)のモノの考え方や捉え方を、メンバーそれぞれの現場に導入して実践し、直面している課題ごとに分かれた小集団活動を中心に試行錯誤を繰り返しながら、現場力の向上を目指した。こうした実践の事例と、そこから得た成果をまとめた。</p>